

附属高校入学後の学業成績の推移

大 西 誠 一 郎

I 問 題

筆者は昨年，“附属中学・高校6年間を通じての学業成績の推移”^(注1)という研究結果の報告を行なった。それは、中学、高校6年間を通じて在学した生徒ならびに、新たに他の中学から附属高校へ入学した生徒たちの、知能検査、進学適性検査ならびに入学後の学業成績をもとにして、各種成績間の相関および成績の推移を考察したのであった。

それらの資料は、校長室の一隅で、倉庫の中から取出した学籍簿をもとにして整理を行なったのであったが、本年は、高校入学後の成績に限り、さらに昨年の結果の一部を追加し、新たに他の中学から附属高校へ入学したものの入学後の成績の推移をも考察してまとめることにしたのである。

しかし、“高校入学後の学業成績”という観点からまとめるために、昨年度報告したものを一部再録して考察を加えることを予め諒承されたい。

さて本研究は、附属高校入学後、生徒たちの学業成績はどのように推移したかを中心として考察することにしたが、そのために問題を次の3つに分けて検討することにした。

- (1) 高校入学時および在学中における各種成績間の相関
- (2) 高校在学中における学業成績の変動
- (3) 附属中学から進学したものと、新たに他の中学から進学したものの成績推移の比較

II 対 象

調査対象としては、昭和34, 35, 36, 37年度附属高校へ入学して卒業した生徒たちである。Table 1.

ここで調査対象となった生徒は、それぞれの学年において在学した生徒の総数ではない。ここでは、高校3年間を通じて在学した生徒のみを対象としたので、このほかにも学年途中で転出または転入した生徒もいる。それらの数は年度によって異なっているけれども、各年2～4名の範囲内であり、学年の進むにつれて学業成績がど

Table 1 調 査 対 象

入学年次	男	女	計
34	49	45	94
35	52	42	94
36	60	40	100
37	60	44	104

のように推移するかをみるという観点からは、除外することにした。

なお本校は、高校入学に際しては、附属中学からの進学希望者と、外部中学からの志願者（無作為抽せんによって受験資格を得た者）に対して、同一問題による進学適性検査（中学校全教科に関する学業成績の検査を中心とする）を実施して入学者を決定している。ただし、附属中学からの志願者に対しては、6年間の追跡研究という立場から判定の基準をかえているため、附属中学からの志願者は、例年8割ないし9割が入学を許可されている状況である。その上、附属高校は中学同様1学年2学級編成であるために他の中学から附属高校へ入学しうるものは、毎年20名内外にすぎない。なお、附属中学への入学は、志願者の中から無作為抽せんによって100名を入学せしめている。

III 結果とその考察

1. 高校における各種成績間の相関

まず、高校入学時の進学適性検査結果および入学後の高1, 2, 3年の学業成績間にどのような相関々係があるかをみよう。なお学業成績は、各科目の学年末評価得点（5, 4, 3, 2, 1の5段階評価の総合得点）をあてておいた。

今、それら成績間の相関を示すと、Table 2のごとくである。なお、それらの結果は、同一学年男女をいっしょにまとめている。また平均は、それぞれの係数をZ変換して求めている。

(a) これらの結果によってみると、高校入学時の進学

附属高校入学後の学業成績の推移

Table 2 高校における各種成績間の相関

入学年次 学年		3 4 (学業)			3 5 (学業)			3 6 (学業)			3 7 (学業)			平均 (学業)		
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
進	適	.56	.57	.49	.69	.64	.61	.79	.76	.66	.70	.63	.56	.68 [△]	.65	.58
学 業	1 年		.91 ^{**}	.75		.92	.86		.92	.84		.92 ^{**}	.77		.92 ^{**}	.80
	2 年			.77 ^{**}		.93			.84			.85			.84 ^{**}	

** 1%以下, * 5%以下, △ 10%以下の危険率で有意差が認められる。

適性検査と、高校入学後の学業成績との間には、ともにかなり高い相関を認めることができる。そしてその相関は、1年、2年、3年と進むにつれて次第に低くなる傾向がある。もちろんそれら各学年の係数の間には、統計的に有意な差は認められないから、ただちにそれを一般化することはできないけれども、その傾向は十分うなづける点である。ただ全体の平均についてみると、進適と1年、進適と3年の係数の間には、10%以下の危険率で有意差が認められる。

岩原信九郎等は、同様の研究においてその相関が、.676～.909の間をわたり、かなり高い値を示す結果を報告している。しかしそれは、“標本が多少低い(成績)方に傾いているからであろう”と述べているが、^(注2)筆者の結果との差異はそこにあるのかも知れない。

(b) 次に、入学後の学業成績相互間には、前者よりもいっそう高い相関を示している。ことに、隣接学年間の相関はもっとも高く、隔たった学年間の相関はもっとも低い。ことに、同じ隣接学年のうちでも、高1～高2の相関はもっとも高く、次いで高いのは高2～高3の間であり、1年隔たった学年相互、すなわち高1～高3との間は、もっとも低い傾向を示している。このことは当然予想されるところであるが、入学後の学業成績の相対的位置関係は、少しずつ変化することを示している。

2. 高校在学中における学業成績の変動

次に、学業成績が在学中どのように変動するかを検討しよう。

高校入学後、卒業にいたるまで引きつづき優秀な成績をおさめるものもあれば、入学当初は優秀であっても次第に下降するもの、あるいは逆に、はじめは劣っていても次第に上昇するもののあることは、日常の経験からも十分予想されるところである。

このことも、昨年度すでに考察した点であるが、本報告においてはさらに資料を追加して考察することにする。

さて、成績の変動をみるためには、それぞれの生徒が

各学年において占める位置を段階づけた。段階は5段階とし、まずそれぞれの学年の平均得点を中心として±0.5SDの範囲内にあるものを3の段階とし、さらにそこからプラス、マイナスの方向へ1SDをとり、それぞれの得点範囲内にはいるものを、4, 5, 2, 1の段階とした。

以上のようにして学年成績の段階づけを行なったが、これをもとにして、成績の変動を次の4種に類別することにした。

- 1) 不変型、成績段階が3カ年を通じて同じもの。たとえば、1・1・1, 3・3・3, 5・5・5など。
- 2) 上昇型、1年時の成績段階よりも、2, 3年時の段階値の差(それぞれ1年との差)の合計が2以上あるもの。たとえば、1・2・3, 2・3・3, 3・4・5など。
- 3) 下降型、1年の成績段階よりも、2, 3年時の段階値の差(1年との差)の合計が2以上下降しているもの。たとえば、2・1・1, 3・2・1, 5・4・3など。
- 4) 小変動型、以上3つの型以外のもの。したがって変動はするけれども、1年時の成績段階値よりも、2, 3年時の段階値の差が1だけ上昇あるいは下降しているもの。たとえば、1・1・2, 3・2・3, 4・4・3など。

以上のような類型にしたがって、高校3年間の学業成績の変動を示すと、Table 3のごとくである。

(a) まず、各年度を通じて不変型がもっとも多く、年次、男女を通じて全体の59.1%を占めている。小変動型がこれにつき、平均25.7%、下降型・上昇型はそれぞれ8.0, 7.2%である。

(b) 次に、男女を比較してみると、34年度入学生徒を除いて、男子には下降型が多く、女子には逆に上昇型が多い。^(注1)このことは、中学生の変動と異なる点であって、中学男子には上昇型がはるかに多かったのである。それが何に原因するかは明らかでないが、高校男子は、大学

Table 3 高校における学業成績の変動

入学年次 性別	34		35		36		37		計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男女計
不変	67.3	68.9	68.5	55.6	52.8	50.0	50.0	59.0	59.3	59.0	59.1
上昇	7.2	8.9	3.5	13.3	3.6	5.0	10.0	6.8	6.1	8.7	7.2
下降	5.5	4.4	14.0	4.4	10.9	2.5	11.7	6.8	11.0	4.1	8.0
小変動	20.0	17.8	14.0	26.7	32.7	42.5	28.3	27.4	23.6	28.2	25.7

入試という目標に向かっていっそうはっきりした意識をもつが、ある生徒は一種の“目標変更”あるいは“目標放棄”を来し、それが学業成績の変動に影響するのかも知れない。しかしその点に関しては、今それを裏付ける資料をもっていない。

(c) 次に、変動の型を中学のそれと比較すると、そこに明らかな差異が認められる。すなわち、中学生にあっては不変型 45.1%、上昇型 17.9%、下降型 7.7%、小変動^(注1) 29.7%であった。高校生は中学生に比べると不変型が多く、上昇型が少ない。もちろん、中学と高校では学業成績の基準がちがひ、中学校は相対評価であり、高校は絶対評価であって、そこから得た結果を直接比較することは無理である。しかしその点は、本附属に関する限りかなり異なった事情にあるので、前述のような比較も絶対いけなしいとは言い切れないであろう。なぜならば、本附属高校は、さきにも述べたとおり無作為抽せんによって選抜された生徒が中心を占めているし、さらに教官は中学、高校ともすべて兼任して、平常は何の区別もなく授業にあたっているからである。これらの事情を考慮に入れるならば、中学よりも高校に不変型が多いということは、高校に進むにつれて学業成績の変動がやや固定して来るものと言うことができる。

(d) なお不変型は、1年から5、4、3、2、1それぞれの段階を3年間通じてとるものであるが、全体として同一段階にとどまるものの割合は、それぞれ8.5、17.8、61.8、10.6、1.3%である。

3. 附属中学から進学したものと、新たに他の中学から進学したものの成績推移の比較

最後に、附属中学から進学したものと、新たに他の中学から進学したものの成績の推移を比較しよう。

新たに他の中学から附属高校に入学するものの数はきわめて少数であるが、それ以外の附属中学出身者は、すでに3年間住みなれた学校であって、他の中学から進学したものは、いわば少数グループとしての問題をかかえている。その中の1つに、学習における影響があるので

はないかと考えたのである。

今ここで、附属中学から進学した生徒は、すでに3年間住みなれた学校へ入って来たと述べたが、これについては特別に説明を加えねばならない。附属中学と高校とはもちろん別個の学校として一線を劃しているけれども、校長は1人であるし、すでにふれたごとく、教官はすべて兼任であり、指導の実際の上ではきわめて一体化されている。普通教室の外はすべて共通であるし、行事も同一歩調で行なわれている。その上、附属中学卒業生の8～9割が高校に進学する現状においては、制度上はどのようなとしても、生徒個々の意識の上では“住みなれた学校”ということは否定することができないであろう。

以上のような事情のもとで、両者の入学後の状況について比較を試みようとしたのである。

ただここで提供しうる資料は、36、37年度入学の生徒についてだけのものであるが、入学時の進学適性検査結果を基準として、その後どのように変化するかを見ることにする。Table 4.

(a) これによってみると、附中出身者が、入学時における進学適性検査以後、それぞれの成績段階にとどまるものの数は余り変化しない。それに反し、他の中学の出身者は、入学時における進学適性検査における段階よりも、その後学年の進むにつれて段階の変化する情況が目立つ。たとえば、36年度他の中学から進学したものは、入学時の進学適性時に5の段階には1人いたが、高校3年では0人になり、進適時では1の段階のものは1人もいなかったが、高1では1の段階のものが2人、高2ではそれが4人となっている。

この傾向は、37年度入学者についてみたときいっそう顕著で、この年他の中学から進学したものは、5、4、3の段階の比較的上位に属するものであったが、高1では2の段階に4人、高2では同じく2の段階に3人、そして3年では1の段階のものが1人でている。もちろん、この年度の他の中学からの入学者で、進適のとき5の段階にいたものは2人であったが、高2、3年ではそ

附属高校入学後の学業成績の推移

Table 4 附属中学からの進学者と、他の中学からの進学者の成績の推移比較（実数）

成績 段階	出身 学年	36年度入学者						37年度入学者									
		附中出身			他の中学			附中出身			他の中学						
		進適	高1	高2	高3	進適	高1	高2	高3	進適	高1	高2	高3				
5		6	6	6	5	1	1	1	0	6	6	6	4	2	2	5	4
4		21	20	20	26	4	5	4	5	13	12	12	16	8	6	4	3
3		25	33	32	25	6	6	6	6	31	36	32	38	13	11	11	12
2		27	20	22	24	5	2	1	4	26	23	24	19		4	3	3
1		5	5	4	4		2	4	1	5	4	7	4				1
計		84				16				81				23			

Table 5 附属出身者と他の中学から来たものの成績変動に関する相関の比較

	36年度入学者				37年度入学者			
	進適	高1	高2	高3	進適	高1	高2	高3
附中出身	.68	.72	.87		.73	.95	.95	
他の中学	.62	.69	.89		.51	.81	.82	

れが5人、4人と増加もしている。いわは他の中学から来たものは、進適では比較的上位にあったものも、入学後は上下へのびて、ことにかなり下の段階まで落ちるもののあることが示される。

(b) もちろん以上はきわめて概括的な説明であるが、さらにこの両者を比較するために、附属中学出身者と他の中学から進学したものの進適と1年、1年と2年、2年と3年との間の個人別の成績段階の推移を求め、それについての相関係数を求めて比較することにする。Table 5.

これによってみると、入学後、学業成績の変動に関しては、附中出身者と他の中学から来たものとの間にとくに有意な差があると言うことはできない。37年度他の中学から進学したものの、進学適性検査成績と高1成績との相関は.51であってかなり低いけれども、人数も少ないために、附中出身者との間にも有意な差があるとは言えない。その他、係数は一般に他の中学出身者のそれが低いけれども、もちろん有意差を認めることはできない。なお、進適と1年との相関は比較的強く、高1～高2、高2～高3と進むにつれて次第に高くなるということも言い切ることができない。しかし、同様な被験者をより多く求めることができるならば、この傾向は一般化しうるかも知れない。

II まとめと今後の問題

以上、昭和34、35、36、37年度にそれぞれ附属学校に入学し、3年の後同校を卒業した合計392名を対象として、かれらの入学時の進学適性検査および入学後の学業成績を中心として、いくつかの問題を考察した。今、そこに得られた結果をまとめるとおよそ次のようである。

(1) まず、高校入学時の進学適性検査および高校入学後の3年間の学業成績間の関係を見た。その結果によると、入学時の検査成績と高校入学後の学業成績との間には、かなり高い相関が認められた。そしてその相関は、学年が進むにつれてやや低くなる傾向があると言える。

(2) 次に、入学後の学業成績相互間には、前者よりさらに高い相関が認められた。そして学年間は、隣接学年間の相関は高く、学年がへだたると低くなる傾向が認められる。

(3) 高校在学中の学業成績の変動を見たが、成績段階の変化しないものももっとも多く、小変動のものがそれにつき、上昇あるいは下降型のもの10%内外である。しかし、中学在学中の変動と比較すると、高校では不変型のものも多く、高校においては、成績の変動がやや少なくなる傾向が認められる。また、男子には下降型に属するものの方が多いが、進学目標の“喪失”あるいは“変更”がそのような結果をもたらしているのかも知れない。

(4) 次に、附属中学から進学したものと、新たに他の中学から進学したものの成績の推移を比較したが、入学時の進学適性検査を基準として考えると、他の中学から

入学したものは、入学後、成績の低い段階へ落ちて行くものがあることが見出される。これが何に起因するかは明らかでないが、他の中学から志願したものにとっては、一発勝負的な性格をもちやすい進学適性検査では、その生徒の将来を予見しうるということがいっそう困難であることを示すのかも知れない。

なお、人数が少ないために、十分有意差を認めることはできないが、入学時の進学適性検査と高校1年の学業成績との相関は、その後の学年との相関よりもやや低い傾向が認められる。

以上は、進学適性検査、在学中の学業成績を中心として、高校に在学した生徒の資料から得たものである。この報告はなおきわめて一般的なものであって、今後の問題としていろいろな点が反省される。

(1) まず第1は、学業成績段階の変化しなかったものについてはしばらくおくとしても、学年の進むにつれて上昇あるいは下降する生徒については、もっと内容的に検討されねばならない。1人1人の生徒の中には、1年生で1の段階にあったものが、2、3年と進むにつれて、3、5の段階へと上昇するものもあるし、それとは逆に、はじめは5の段階で入学したものが、卒業学年には1の段階にてん落しているものもいる。それらはすべて偶然ではなく、内部的な力やさらに外部的な条件がからみあってそのような結果を生んだのであろうが、そうした生徒の検討こそはさらに掘り下げてなされねばならないのである。

(2) 次に、従来本校は6年間のけい続研究というねらいのもとに、中学から高校へその大部分のものが進学していた。しかし、そのこと自体は一方、いろいろな反省、批判をおこさせたのである。“附属中学生は本気になって勉強しない”。“のびのびしすぎている”。それでは真の学力がつかないので、一般普通の中学生のように、受験地獄の中に追いやって、試験、試験で追いまく

った方が“実力”がつくと。

このような批判はもっともな意見のようであったけれども、私は今、この資料を検討しつつ、本校の従来の教育方針は決して誤っていなかったことの反省を強くしている。たまたま私は4月以来学校長の職を解かれ、今はむしろ自由な立場でこのことが考えられるのであるが、附属中学から高校へ進学した生徒たちが、学校行事やクラブ活動に非常な熱意を示し、いわゆる我利我利盲者の勉強家ではなかったけれども、外部から新しく入学したものに比較しても、決して“実力”が劣っているとは言えないのである。われわれは10年後、20年後の人間の成長の基礎を育てることを期待したいと言いつづけて来たが、それが単なるそら言でないように思う。

さて、幸にも本年度から高校の学級増が認められた。そのため、昭和40年度は附属中学出身者80名に対し、他の中学からの入学者は70名であった。従来の80対20という関係から80対70という関係へ変化した。それは、附属学校にとっていろいろな面に変化を来たすことが予想され、またそれに対して効果的な指導をどうするかについてはいろいろ検討されていることであるが、学業成績の上にもどのような変化をもたらすかは将来の問題である。それはまた将来の実践と研究とによっていっそう明らかにされることが期待されるのである。

注1. 大西誠一郎、附属中学・高校6年間を通じての学業成績の推移、名古屋大学教育学部紀要 1964.

注2. 岩原信九郎、佐藤愛子、高等学校における入試および知能の学業成績との相関について、教育心理学研究 1962. 10巻 4号

付記 本研究を進めるにあたっては、附属学校教職員にいろいろ援助をいただいた。記して厚く感謝の意を表したい。(1965年8月)